



ニッポン復活オリンピック  
ニッポン復活パラリンピック  
**TOKYO ● 2020**

APRIL 27, 2012

特定非営利活動法人東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会評議会は、2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会招致をオールジャパン体制で推進するため、国、政府、経済界、スポーツ界、全国関係団体等の皆さまにより構成されています。

**TOKYO2020オリンピック・パラリンピック対談**



2020年、  
オリンピック・  
パラリンピックを日本で!

第1回

**山下泰裕**さん

認定NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

ニッポン復活を主題に動き出した東京2020オリンピック・パラリンピック招致。小倉和夫評議会事務総長が各界で活躍している方々と対談し、東京で、日本でオリンピック・パラリンピックを開催する意義、目的、課題などを発信していきます。

■大切なのは、相手を敬う気持ち

小倉 山下さんは、これまで中近東や中国、ロシアなどで国際的なスポーツ交流を積極的に行ってこられました。国際的な相互理解を深めるためにスポーツの果たすべき役割についてどのようにお考えですか。

山下 東海大学の創設者の松前重義前総長から、「山下君、僕が君を応援してきたのは、試合で勝ってほしいからだ けじゃないのだよ」と何回か言われたことがあります。「君には日本で生まれた柔道を通して、世界の若者たちと友好親善をしてほしい。そして将来的にはスポーツを通して、世界平和に貢献できる人物になってほしい」と。

正直言ってその時は私もまだ若かったので、一体自分に何ができるのかと思ったのですが、スポーツ交流を進めていくにつれて、柔道の心、つまり日本の 和の心を伝えていきたいと思うようになりました。それで2006年に、柔道を通して国際交流の促進を図る認定NPO法人「柔道教育ソリダリティー」を立ち上げたのです。

小倉 その柔道の心というのは、具体的にはどういうものになりますか。

山下 自分の主張をするだけでなく、相手の立場にも立って物事を考えていくという精神です。私は、こういった精神がグローバルに広がっていくことで、それぞれの国が自分の主張をしあうだけでなく、どうしたら調和のとれた世界を構築できるかということを考えるきっかけになると思うのです。

柔道で最も大切なのは、戦う相手に対して尊敬の気持ちを持つことです。柔道では対戦相手は敵ではありません。相手がいるから、自分も成長できるので。だから戦う相手に対して、感謝の気持ちを持つことができるのです。試合開始前にお辞儀をしますよね。あれは、謝る時にするものとは違います。柔道のお辞儀は、相手への敬意を示すものなのです。

柔道の創始者である嘉納治五郎師範は、そうした精神を日常生活に活かすことが社会をより良くすると考えていました。勝ち負けだけにこだわって、柔道精神をないがしろにすることだけはしてはならないと言っています。柔道がどんなに強くてもそれは本当の柔道家とは言えないと。柔道を通して学んだことを人生に活かしていくことが大切なのです。



## ■オリンピック精神の原点に戻る

小倉 なるほど、そうしたお話を伺いますと、1984年に行われたロサンゼルスオリンピックの男子無差別級の決勝で山下さんと対戦したモハメド・ラシュワンさんのことを思い出しますね。山下さんの負傷した右足を攻めず、惜しくも銀メダルという結果になってしまったのですが、その年のユネスコの国際フェアプレー賞を受賞しました。私などは、そこにスポーツマンの理想像を見る訳ですが、最近のオリンピックを見ても、勝ち負けにこだわる結果主義が横行しているような気がしてなりません。

山下 勝負の世界は厳しいですからね。0.01秒の差で、1位と2位、あるいはメダルを取る取らないとなって、その差は歴然ですから。残念ながら、そういった風潮がますます強くなっているのは否定できないですね。



小倉 そうした流れを変えるためには、どうしたらよいでしょうか。

山下 原点に帰ることですね。柔道なら嘉納治五郎師範の柔道精神の原点に、オリンピックならクーベルタン男爵の唱えたオリンピック精神に立ち戻る必要があると思います。

小倉 スポーツ全体がショービジネスのようになってきて、それが勝敗の結果にこだわる傾向を助長しているような気がします。「ショーなんだから、とにかく面白ければいいんだ」ということでスポーツが娯楽の一種になってしまっている。それに商業主義が拍車をかけて、本来のスポーツマンシップの精神がどんどん希薄になっている。後世の人々が、2020年の東京開催を境にして、オリンピック精神の原点復帰が行われたと言われるような大会にしたいと考えています。

山下 そうですね。派手にショー化していけばいくほど、オリンピック精神の原点から離れていってしまいますよね。

小倉 ですから、極力無駄を省いて、コンパクトな東京オリンピック・パラリンピックにしようと思っています

す。日本だけでなく、世界的にも経済状況や環境問題はシビアになっていますから。行き過ぎた商業主義を、東京でいったんストップできたらと思います。東日本大震災があって苦しんでいる時期になんてまた東京に招致するののかという意見もありますが、私はこんな時だからこそ、あえて日本で開催することの意義があると思うのです。

### ■3.11 以降、スポーツのもつ力を実感

山下 3.11 以降、私が実感したのは、スポーツのもつ力です。震災に対して様々な人が支援活動を行いました が、プロ、アマを問わず、スポーツ関係者が立ち上がって、自ら出来ることを考え、実際に行動に移していきました。特に私より若い世代の方々がとても積極的に行動していたのが印象的でした。それが被災地の方々の大きな励ましになり、元気を与えました。

例えば、なでしこジャパンの活躍。被災地で厳しい状況の中にある人々に、彼女たちのひたむきに頑張っている姿が大きな感動を与えました。それで、我々も頑張ろうと、新たな力を与えたことは間違いありません。

小倉 2020 年に向けて、日本がこれから力強く復興していくんだという姿勢を世界に示すことも必要です。世界の人々が、引き続き日本に対してエールを送り続けてほしいというメッセージを発信していくことも大事ですから。

山下 日本人が絆を大切に、痛みを分かち合いながら支えあって前向きに生きているということと、2020 年に向けたオリンピック・パラリンピックの招致ムーブメントをスポーツの力でうまくリンクできれば、日本全体にとってとてもいいことだと思いますね。



小倉 オリンピック・パラリンピック招致の仕事を引き受けてから、私は「スポーツ・フォー・オール」ということをよく考えるようになりました。フランスの柔道人口は、日本の 20 万人に対して、80 万人にもものぼっています。フランスでなぜこんなにも柔道が盛んなのか？フランスに暮らして分かったのですが、町道場が至るところにある。日本で中学校の教育課程で武道が必修化されたように、柔道は学校教育を中心に行われてきました。柔道に限らないですが、スポーツと社会ということを考える時、私はスポーツを社会教育の中にもっと採り入れるべきだと思います。

山下 学校教育がスポーツの普及振興に果たした役割というのはかなり大きいと思いますが、「スポーツ・フォー・オール」という視点で考えると、その弊害もありますね。学校が中心になっているゆえに、若い者だけ、競技者だけ、さらに言うと、勝ち負けだけが優先される 傾向が、ヨーロッパに比べると強いのは確かですね。これからはスポーツがもっと市民生活の中に息づき、地域コミュニティにおいてスポーツを通して豊かな人生を送るという考え方がもっとあってもいいと思います。

柔道に関していうと、子どもからお年寄りまでが気楽に汗を流せるような環境づくりですね。私が思うに、スポーツが最も必要なのは、40 代、50 代の働き盛りの世代です。体力づくりという側面だけでなく、孤独感や疎外感の解消にもつながりますしね。

### ■パラリンピック選手のお礼に涙とまらず

小倉 もう一つ、「スポーツ・フォー・オール」の視点で、オリンピックを考えると、パラリンピックの重要性が浮き彫りになります。オリンピックというのは、オリンピック・パラリンピックが一体化しています。現

在のスタイルですと、オリンピックが開催されて、その数週間後に、全然別のものとしてパラリンピックが存在している。この2つが同じスポーツの祭典だということを、多くの人々に理解してもらえないといけない。

柔道に関していえば義足の選手がいたりしますが、障がい乗り越えて戦っている姿を見ると、非常に勇気づけられます。そこにはいろんな意味があります。誰が障がい者で誰が健常者かというのは連続的な話であって、怪我をしたり、調子が悪くなったりしたら、その立場が入れ替わる可能性は常にあります。もちろん一緒に出来ないことはたくさんあるとは思いますが、全く別物だと考えるのは止めた方がいいと強く思っています。

山下 その通りですね。1996年、アトランタ大会の時、パラリンピック日本代表とオリンピック日本代表が最初の合同合宿をしました。ちょうど私がオリンピックの監督として初めて参加した時です。パラリンピックの日本代表チームの方から、海外の選手になると体型も違うし、得意技も違うので、対戦法を指導してくれないかということでした。

全日本のコーチをはじめ、小川直也や古賀稔彦、吉田秀彦、野村忠宏などが、下の階にある大道場に練習の合間をぬって出稽古に行ったんです。正直言ってレベルが全然違いますから、一緒に稽古してもお互い技術的にはほとんどメリットがありません。でもお互いの心に与えたインパクトは強烈でした。合宿最後の日に向こうの代表がお礼の言葉を述べた時、涙で言葉が出なかった。そこから交流がスタートして、今も続いています。

## ■オリンピック・パラリンピック招致の目標を高く

小倉 今回の招致活動では、私はこの「オール」ということをポイントにしたいのです。



前回の招致活動の際には、開催招致地である東京の熱が冷めていたと指摘されましたが、その反省にもとづいて、今回はみんなで一緒に盛り上げるようにムードを高めていかなければなりません。そのためには、オリンピック・パラリンピック招致が東京都民のみならず、国民の一人ひとりにとって大変に意義があることを理解してもらうことが第一です。

そのために、みんなで応援する機運を高めていこうと考えています。山下さんが言っていたような精神的な要素が、私たちが気持ちを合わせ前を向いて進んでいくために、

これからとても重要になってくると思います。

山下 3.11を契機にして、絆を高めていこうという気運が盛り上がっていますからね。日本人が本来もっていた心を取り戻すようなきっかけづくりとして、スポーツマンシップですとか、フェアプレーの精神というのは日々の暮らしの中でも取り入れられるのではないのでしょうか。大会招致を目指していく中で、日本再生の糸口を見い出していけたらいいですね。

小倉 例えば、インターネットを通じて、招致に賛同していただいた方々に100円でもいいから寄付を募り、広い国民各層のサポートが得られるような仕組みづくりが出来ないかと考えています。100円の寄付が1万人集まることが大事です。

山下 東京のため、日本のため、ひいては世界と未来のための招致をお考えになっている訳ですね。

小倉 極端なことを申し上げれば、オリンピック・パラリンピックを招致できればそれでいいと私は思いません。招致するということが自体、実はもっと広い、もっと長期の目標のためなのだ。招致活動の中で、きっと様々な副産物が生まれてくるはずですよ。

撮影＝大久保 恵造



**山下泰裕**

認定 NPO 法人柔道教育ソリダリティー理事長、東海大学理事・副学長。1957 年生まれ。東海大学大学院体育学研究科修了。現役時代、全日本選手権にて 9 連勝、1981 年の世界選手権無差別級優勝、1984 年のロスオリンピックの無差別級にて優勝を果たすなど活躍。そして、1985 年、203 連勝にて、現役選手を引退した。2016 東京オリンピック・パラリンピック招致大使に任命された。



**小倉和夫**

特定非営利活動法人東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会 評議会事務総長。1938 年生まれ。東京大学法学部、英国ケンブリッジ大学経済学部卒業。1962 年外務省入省。文化交流部長、経済局長、外務審議官、駐 ベトナム大使、駐 韓国大使、駐フランス大使などを歴任。2003 年 10 月から 2011 年 9 月まで独立行政法人国際交流基金理事長を務める。青山学院大学特別招聘教授。